

直木三十五全集

7

直木三十五全集

7



示人社

直木三十五全集第7巻

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発行所 株式会社 示 人 社
東京都文京区水道一―九―一

郵便番号 一―二―

電話 東京三八二―二四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 装幀 イワサキ・ミツル

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第7巻（昭和9年8月12日発行）を用いた。

第七卷目次

日本の戦慄

著者の言葉	二
癡人と其子供達	二
去る	三
黄褐の海	四
近づく	六
最初の日	六
最初の夜	七
その夜、次の日	二〇
江　　灣	二七

同じで、異つた―

一五四

満蒙の戦慄

青い夜、黒い夜

一七四

踏出す者

一八六

堕ちた者

二六

進軍

二六

轉落

二六四

闘争

二九

再生

三四九

大陸晴る

四〇九

胡北寒し

四六一

日本 の 戦 慄

り切れねえや」

老人は、表紙の取れた講談本を、膝の上へ置いて

「満洲を×つても、景氣は、ようならんか」

「より成るもんか。親爺が、満洲で戦つた時たあ、社會が、ちがつて來てるからなあ」

「ちがつてるな」

足音がして、婆さんが、夏井の得ろを、通らうとした。

夏井が、膝を上り口へ當てゝ、狭い土間を廣くすると

「上つたら」

と、云つて、流し元へ、しゃがんだ。そして、柴を、べきき折つて、七輪の中へ、重ねた。夏井は、それを見ながら、上り口へ腰をかけて

「鳥見澤までとられては、堪らねえからね。随分心配したよ。××戦争で、大事な兄弟を、××さしちやすまんかな」

「ふむ——下火になつたかなあ」

「すつかり、追つ拂つちまつたから——これで、親爺さん、満洲を取つてさ。どうなるか、と云ふと、又、ブルジョアの×さ。日露戦争で、親爺さんが、養兵になつて——かうして、貧乏して——」

夏井は、ポケットから、煙草を出して、七輪の火をつけ

に立つた。鳥見澤老人は、俯向いて、眼を閉ぢてゐた。

「戦死したり、養兵になつたり——」

夏井は、元の所へ、腰をかけて

「そして、誰が、儲けたかといふと、ブルジョアだ。金持の野郎は、日露戦争で、親爺さん、やつらの財産を、うんとこさと、増やした。五倍にも、ふやしやあがつたけど、俺達プロレタリアが、こんな貧乏長屋を一軒でも、建てたかい？」

金廻りがよくなつたので、晩酌が一本ふえた位が、俺達へのお恵みさ。ブルジョアの、お裾分けを頂戴して、景氣がいゝ、いゝつて、有頂天になつて——」

「全く、よかつたなあ、あの時分は」

老人は、顔を上げて

「この時で、お前、養者買ひに行つた事があるんだよ。その婆め、やきもち、やきくさつて——」

婆さんが

「何云うてるよ。とぼけ」

夏井は、自分の言葉、少しも、理解しないやうな老人の態度に、怒りと、不快さを感じながら

「なあ、婆さん、××つて奴も——××つて奴も、ひでえ奴ちゃあねえか、親爺を、××××逢はしておいて、救護金だつて、もう、打切るつてんだらう」

「あゝ、それで、困つてるよ」

「一日、四十銭——何んだ」

「さういふけどな——」

と、老人が、呟いて

「諦めてるよ——娘も、働いてくれるし、——近頃は、六十圓にもなるからな」

夏井は、吉子のことを聞くと

（美しくなつたやうな）

と、何よりも、烈しく、頭と、心臓とを刺戟した。朝早く出て行く夏井と、午後二時に出て行く吉子と、六時に歸る男と、午前一時に歸る娘と——そして、夏井と、彼の親友で、吉子の兄である烈とが

「俺は貴様に、もらつてもらひたいが、あいつが、どういふか」

と、云ふやうな話をしてゐても、二人の間は、二人の時間（吉子も、酒場なんかへ行くブルジョアの弄物になるのだらう——）

もう、二ヶ月以上も、逢へなかつた、同じ、長屋にゐて隣り同志であつても——

（奇生——どうすりや、いゝんだ）

夏井は、この事を考へると、思考力が無くなつて、心臓と、血と、熱とだけが、昂まつてきた。

二

バアテンの、白よりも、白い服——女も、もう化粧をすましてゐたが、同じ女で、そして、夜の光の下とは、ちがつた女。棚の、瓶のレッテルも、扉の硝子も、何もかも、夜とはちがつて陰惨であつた。

ボックスの中には、不得手な、晝間の顔と、着物をな

らべて——山の少し垢じんだ帯、下前と色のちがつた上前の訪問服——

「今頃、何よう」

江南は、バアテンの笑顔を、うけながら、その叫びに

「飯だよう」

「あら、貴郎だつて、御飯を上げるの？」

「どういふものか、一度、見て見たいと思つてね」

江南は、一人の女の側へ、腰をかけて

「ナフキンでも、折らうかね」

「へんだ、女給にナフキンを折らせるやうな、チャチな酒場と酒場からがひますようーだ」

一人が

「新聞記者つて、下情に、通じてゐらつしやるから」

「うん、掃除をして、水を撒いてやつた事もある」

「あら、ボーイが喜ぶわよ、明日から、来ない、水撒きに」

「来るよ。所で——食べる物だが、何んでもいいから、早い所、三品ばかり——」

「何が——」

「任せておくつて」

一人の女が立つと、一人の年増が

「貴美ちゃん、早いだけぢやあ駄目よ。この人、安いつて

のさ、忘れてゐるんだから、安くて、早い所」

「この婆も、忘れてやがらあ、早くて、安くて、うまくて

盛だくさんで——」

「その代り、昨夜の残り物でいゝつて」

女が、笑ひながら、去つた。江南は、煙草を出しながら

「時に——」

「よう。待つてました」

と、年増が、手を叩いた。

「これが、君達とのお別れになるかも知れん」

「あら、いよく發覺したの？ ちよいと」

「何？」

「自首した方が、罪が軽くなるよ」

「名譽の戦死つてやつた。上海が、物騒なので——」

「名譽の負傷ぢやないの」

「そんな物は、しよつ中してらあ、十二の時から、してらあ。今度は、戦死だ」

「ね、いよく頭へきて、助からなくなつたのね。遺産、いくらあるの？」

「婆、うるせえ」

「江南さん死んだら、妾、本當に、この位悲しんで上げるわよ」

年増が、兩手で、大きい輪を作つた。そして

「どう？ ずゐ分、悲しいわね」

と、攜けてゐる兩手を見廻した。一人の女が

「妾、この位」

と、人差指と、親指とで、圓を作つた。

「本當に、上海へ行くんだよ。戦争が、始まるかも知れな

いんだ」

江南が、さう云つた時、一人の女給が、出てきて、つゝ

ましく、御叩頭をした。

「よう、吉ちゃん、來給へ」

「え」

「僕は、明日から、上海へ行くんだよ」

「上海？」

「知つてゐるかい」

「え、アメリカの真中にある所でせう。人口三人、酒場が千軒、新聞記者なんか一人も居ないんですつて」

年増が

「さぞ、せい／＼する事でせうね」

と、云つて、胸を撫でた。そして

「早く行つて来い、死んで来い。うるさくなくつて、とつびきびきのび——ッ」

節をつけて唄つた。

「このやり手婆」

「とつびきびのび——いつ」

年増は、立上つて

「吉ちゃんが来たら、急に、ニコ／＼してゐるわ。現金野郎。び——いだ」

と、叫んで、行つてしまつた。

三

吉子が、ボックスの横のテーブルから、椅子を引出して

腰かけた。そして

「本當に、上海へ行くの？」

「あ、行くよ。本當の倍、三倍、本當だよ」

「そして——戦争、本當？」

「そいつは、だらう、だけど——君の兄さんは、危いんだらう」

「え、上海に又、始まつたりしたら、困つちやうわ」

「さうだらうね。同情するよ」

「お父さんが、日露戦争で、廢人同様なんです。その上に、兄さんに、もしもの事が有つたら、めちやく／＼になつちまうわ」

「全くな」

一人の女が

「いやに、しみみりとした顔をするわね」

「顔だけちやあねえや、このへんから」

と、江南は、腹を指さして

「しみみりしてるんだよ」

「本當に、始まるかしら」

吉子は、首を傾げて、自分の指先を、ちつと、眺めた。

「吉ちゃん」

「え」

「もし、始まつたら、僕も、前線へ出て、彈丸の中をくぐらんだが——一生の思出にだね」

「え」

吉子は、俯向いたまゝであつた。

「接吻でもしないかい」

「接吻？——さうね、『身の上』で、聞いてみるわ」

外の女が、笑つた。

「戦死するかもしれないんだから——」

吉子は、顔を上げて

「死んだら電報頂戴、すぐ、行つて上げるわ、そして、接吻して、抱擁して、泣いて上げるわ。すると、聯隊長が、

ほろりとして、いや、お前は吉子ちゆうか、相當感心なもんぢや」

吉子は、さう云ひながら笑つたが、どつかに、淋しい陰があつた。

「一生一代の頼みだが——」

「これから、何軒、そんなこと、云つて廻るの」

一人が口を出した。

「ひでえ事を云やがる。死んでから、びつくりするさ。同

じ死ぬんだつて、名譽の戦死つてやつたぞ」

吉子が、江南の顔をみて

「死ぬの、およしなさいよ。××××××、——前線へな

んか、出るものぢやないわよ。お父さんのやうに、二十五年間、癡人同様になつて生きてゐて御覽なさい。まだ、死

んだ方がましだけど——お父さんなんか、妾の小さい時は

いろんな事を云つて、まだ、怒る元氣があつたけど、此頃

はもう、もう、そんな力も無くなつたわ。二十五年間、癡人になつた××つたら、勳八等白色桐葉章の一時金が百圓

と、傷夷一時金百八十圓と」

吉子が、こゝまで云つた時

「どうしたの？」

と、云つて、第一の皿を、一人の女が、運んできて、人

人の顔を見た。

「つまらないわよ——新聞社は、もつといふでせうけど、

それでも、死んだら、つまらないわ」

女が、皿を置きながら

「死ぬ話？」

と、聞いた。誰も、それに對して、答へなかつた。江南が

「よく判る」

と、頷いて

「紙上で、一つ、問題にしてみよう、いゝ機だ——然し——

誰の罪か？」

「政府と、××、社會だわ」

「常識的に云へば——」

「ぢや、新聞記者的に云へば、ちがふの？」

「さう簡單には云へ無いよ——怒つてはいけないよ」

「怒らないわ——どんなこと？」

「癡兵自らも、所謂、戦後の景氣に、胡麻化されてゐんだ。自分らの力で、日本の勝つた事に、得意になつてゐたし、人心が、どんなに醒め易いかも、考へなかつたんだ。嚴正に批判すればだよ。政府が十分の所置をしないといふ事は、別問題としておいてだね——さういふ犠牲者に對して、満足な生活を送らせるやうな社會なら、こんな險惡な社會にはなりはしない。現在に於て生存するといふ事は、戦争以上の争闘だ。その争闘の中で、癡人であるが故に、ハンデーキャップをつけろと云つたつて、今云つたやうにそれが、つけられる位の社會なら、戦争以上の争闘は、起りやしないんだ。國家の爲に盡した、といふ理由のみで、國家が、癡兵の生活の保障ができるやうなら、こんな社會にはなりはしない。國家や、陸軍が冷淡のではなく、矢張り、組織の缺陷だし——」

「貴下、癡兵になつた事が無いから、駄目」

「いや——」

「駄目」

と、叫ぶと、吉子は、立上つた。

「吉つちゃん」

吉子は、返事をしないで、唇を嚙みながら、去つて行

つた。

四

「軟弱外交か」

と、國栖は、呟いて、灰を指先で、叩落して
「君等あ、軟弱々々つて、外交のみを罵るが、外交獨り、單獨にて、軟弱には成り得るもので無いよ」

ホール——さう名がついてゐるが、狭い——すぐに、煙と、炭酸瓦斯とで、充滿するやうなホールに、七八人の同僚が、ストーヴを圍んで、靴の尖と、手とを、突出してゐた。

「と、いふと」

「歐米崇拜は、獨り、外交官のみでないし、インターナショナル的思想を追ふ者も、獨り外交官のみでは無いと、日本及び日本人の位置と、價值とを、正確に、認識してゐない者も、獨り外交官のみではない——」

「中でも、外交官がひどくつて、弊害が多いつて事なんだ」

國栖は、ストーヴへ、煙草を投込んで

「ワシントン條約といふ、べらぼうな條約を取りめる時、國民は、何うしてゐた？ もし、今、あの屈辱條約を締結しようとするなら、外務大臣は、又××××、××××だらう。だが、九ヶ國條約の時には、黙つてゐたんだぜ。そ

れに、外交官の軟弱さ、自分は、昔時から、強硬だつたやうな顔をして責めるのは、ちゃんちやら、をかしいつてんだ。僕は、假令外交を、斷じて排撃するが、かういふ國民をも、共に排撃するね。見給へ、滿蒙は、日本生命線だなど、今こそ、しやきり立つてゐるが、もう、五六年も経てば、又、忘れてしまつて、支那人の爲に利益になるばかりだ。大體、日本の外交なり、何なりの對歐米軟弱は、今に始まつた事ぢやないからね。そも、維新の元勳なんて野郎が、ことごとく、盲目的な、歐米崇拜論者だ」

「國栖」

と、呼んで

「いつ、そんな講義を聞いてきた？」
「淺草のとき屋が、喋つてゐた。然し、眞理は、とき屋でも、新聞記者でも、變りはない」

「あの子の前へ行くと、變るだけだ」
「眼尻が下つてね」

と、一人がいふと、外の一人が

「最も、變化するのは、財布だ」

人々が、笑つた。一人が

「それから——」

「この生徒が、次を開きたがつてゐるよ、國栖」

「維新當時、歐米へ行つた奴は勿論、行かない奴も、歐米の外観文明、外的、機械的、科學的文明に、びつくりして

——日本の事情も、又、それを取入れるのに、急ではあつ

たが、そのみを取入れて、一人として、その内的な文明を、精神的方面の事を、取入れ、研究する者がなかつたの

だ。だから、鹿鳴館時代といふやうな、淺ましい時代が現出したのだ。その思潮が、未だ國民の中に混つてゐる。い

いかい、外交官もさ、政治家も、日本人よりは、歐米人がえらいと、未だに、考へてゐるのだ。そこへもつてきて、

歐洲大戰後に勃興してきた、平和論、國際主義的思想——外交官がそれに共鳴して——いや、媚びたと云つた方がい

いが、彼等には、それは判らないだらうな。それが、判る位なら、日本の特殊的位置が、判る譯だから——」

「日本の特殊的位置とは？」
「隣りに、支那といふ、絶大なる化け物を据ゑてゐるといふ位置だ。日本を、イギリスとすれば、イギリスへ吹いてく

るフランス、ドイツの風と、支那から、日本へ吹いてくる風とは、ちがつた匂の風だよ。それを同じ風と考へる所

に、認識不足がある。化け物を對手にするのと、同じ態度に出で、歐米人の外交から、稱められ、同情されようとし

た日本の外交官の腰抜け加減が、まちがひの因なんだ」

國柄が、かう云つた時、江南が、入つてきた。

「よう、カツフエ便衣隊」

と、一人が、迎へた。江南が

「十言居士、長講一席やつてるな」

國柄が、振向いて

「居士の土産に、聞いて行くか」

「さういふ貴様に、死相が、現れてゐるぞ」

江南が、人々の腕と、腕との間から、ストローへ、手を出した。

出した。

五

忙がしい——だが、重い、靴の音が、近づいてきた。

「列だよ、お前さん」

と、云つて、手を延し、障子を開けて、首を出した。

「寒い」

老人は、眉をひそめて

「早く、閉めろ」

「今頃——どうしたんだろ」

「本當に烈か」

老人は、さういふと、老妻を、睨みつけるやうに見た。

靴音と一緒に、戸が開いて、烈が黙つて土間に立つた。

老人も、老妻も、今時分に、その伴が戻つてくるといふ事が、何であるか——きつと、それに、ちがひ無いとは、

感じたが、それを、考へてみることも、それを信じることも、二つながら、××的なものであつた。だが、外の理由を考へる事は出来なかつた。烈も、黙つて、軍帽を脱いだ。

そして、上り口に、腰かけて、靴を脱ぎながら

「夏井は、もう、戻つてくるな」

母親は、烈の口から、さう烈が云つてゐる間でも、自分が、それに對して、答へる間だけでも

「出征」

と、いふ言葉を、××××なかつた。きつと、さうだと、

信じてゐながら——もう、衰へた心臓を喘がせながら、もろくなつた涙腺に、一杯、涙を湧かせながら——一時の間でも、その恐ろしい××××、××××なかつた。それで、

周章で、

「さうだよ。もう、暗くなるからの」

老人が

「出征か」

と、云つた。老人は、その妻のやうに、心の中で、それを押へておく力が、無くなつてゐた。どつちでもいゝから

——早く、××し、安心をしたかつた。だが、さう云ふと、

烈の眼を、鋭く、ちらつと見て、すぐ、自分の膝へ、眼を落した。

「死にやあしないよ。親爺さん——誰が、×××××、戦死なんぞするもんか」

烈が、坐つた。三人は、暫く、黙つてゐた。母親が、涙を、袖で拭いた。草履の音がして、隣りの女房が

「烈さん」

と、のぞき込んで、素早く、母親の袖と、二人の沈黙とを見て

「赤澤かね」

「うゝ」

烈が、俯向いたまゝで、答へた。

「×××まふね。今、働き手をとられては、おらが國の甥も、満洲へ行つとるが、お國の爲に仕方無いが——本當に——×××事だあね」

向ひ側から、下駄を、かたくさせると、老人が出てき

「行くんかい」

と、土間へ入つてきた。

「あゝ」

と、老人が、頷くと

「この町内からは、最初だらう」

「あゝ」

「困るなあ困るが、名譽も、名譽だ。なあ、烈さん。金鶏勳章でも、もらつて歸つてきてくれりやあ、この長屋も、町内のくそたれに、大手を振つて、歩けらあ」

烈が、振向いて

「死んだら、どうなるんだい」

と、睨みつけた。

「死んだら？」

「誰が、この二人を養つてくれるんだい」

「そりや——怒つたのかい」

「親爺に、町内から、何かしてくれたか、俺が、戦死して、そんな薄情な奴に、葬式してもらつても、浮はれるかい」

「ふむ——悪かつたなあ」

男は、下駄を、引ずつて入つてしまつた。

「夏井の婆さん」

と、烈が、呟鳴つた。立つてゐた女房が、夏井の家の入口へ行つた。

「お婆さん」

と、呼んだ、烈が

「夏井、もう、歸る時分だらう」

「あゝ、烈さんかね、もう、歸る時分だよ、よう戻つて來たなう」

と、云つて、出てきた。そして

「戦あ、まだ、濟まんのけ。倅が、心配してるんで——」

「それで、夏井に、逢ひたいんだ。他所へ廻るやうなことは、あるまいな」

「廻るもんけ、もう、歸つてくるよ」

老婆は、空を見上げて

「明日も、えゝ日和だ」

と、呟いた。

六

「とうく、やつて來やがつたか」

夏井は、握りしめた拳を、膝の上へ置いて、その強い色と、突起とを、みつめながら

「××××。卑怯と、云はれたつて、何んだつて——俺達の同志も、きつと、大勢あると、思ふんだ。親爺さんが、

やられた時代のやうな兵隊とはちがつてるよ。俺は、満洲の戦争だつて、その軍國美談、愛國美談のうしろにやあ、

相當の不美談も、あると、思ふんだ。きつと、こんな、資本主義×××××としてゐる農民や、労働者が、あると思ふんだ。もう、俺達の運動だつて、相當長いんだから、日

露戦争とは、變つてるよ」

「將校の中にも、日露戦役の時より、兵は弱くなつてだらう、と云つてゐる人があるからね」

老人が

「さうかも知れん。わしらの時には、烈の云ふやうな、階級とか、何んとか——」

「社會つて字を使つたら、發禁になつた時代だからねえ」

「さうだつてねえ」

と、烈が、頷いて

「俺は、とにかく、タンクの後から、くつついて行くよ。人の後方から、走るんだ」

老人が

「さうは行かん」

と、首を振つた。そして

「わしも、そんなことを考へてみたが——中々、さうはいかんもんで」

母親が、汚い、小さい風呂敷包と、葱とをもつて、小走りに、戻つてきた。

「寒かつただらう」
烈は、側の七輪へ、火鉢から炭火を移した。夏井は、包の中から、豚肉の容物を出して